

流動性の罫での財政政策の効果について

最も単純なニューケインジアンモデルは、2本の方程式で構成される。

(1) ニューケインジアン・フィリップス曲線

$$\pi_t = \beta E_t \{ \pi_{t+1} \} + \kappa \tilde{y}_t$$

π : インフレ率

$\tilde{y} \equiv y - y^n$: GDP ギャップ

y : 現実 GDP の対数

y^n : 潜在 GDP の対数

(2) 期待 IS 曲線 (オイラー方程式)

$$\tilde{y}_t = -\frac{1}{\sigma} (i_t - E_t \{ \pi_{t+1} \} - r_t^n) + E_t \{ \tilde{y}_{t+1} \}$$

i : 名目金利

$r_t^n \equiv \rho + \sigma E_t \{ \Delta y_{t+1}^n - \Delta g_{t+1} \}$: 自然利子率

Δy^n : 潜在成長率

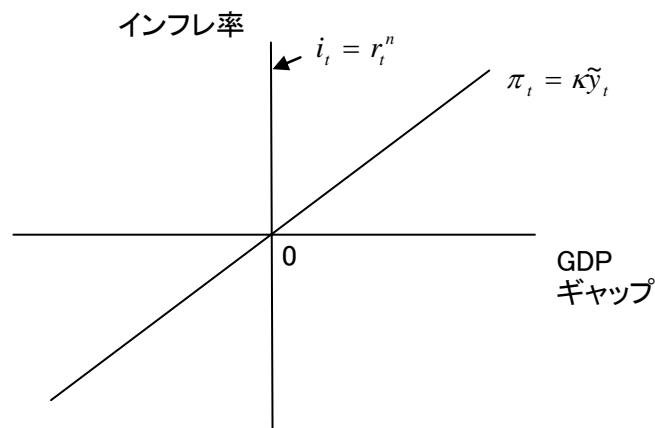
g : 政府支出の対 GDP 比

$t+1$ 期では、経済は潜在 GDP 水準にあり、物価が安定していると、

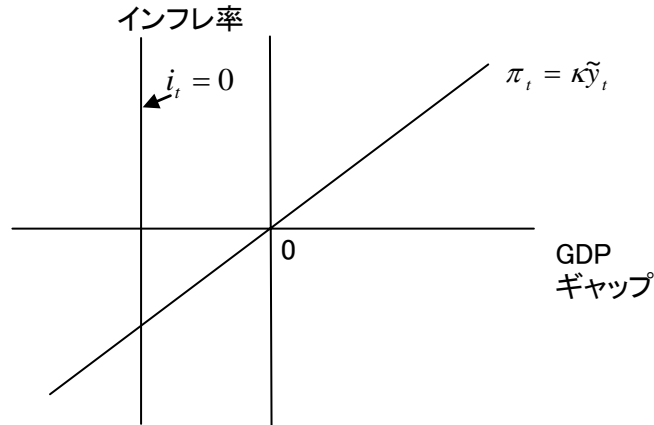
$$\tilde{y}_t = -\frac{1}{\sigma} (i_t - r_t^n)$$

$$\pi_t = \kappa \tilde{y}_t$$

中央銀行が t 期に名目金利を自然利子率と等しくする ($i_t = r_t^n$) ことで、経済と物価の安定が実現される。



しかし、自然利子率が負になったとき、名目金利がゼロ ($i_t = 0$) でも、経済は潜在 GDP 水準以下になり、デフレが生じる。



そのときの、GDP ギャップの大きさは、

$$\tilde{y}_t = \frac{\rho}{\sigma} + E_t \{ \Delta y_{t+1}^n - \Delta g_{t+1} \}$$

となる。

政府支出の成長率が低下すれば ($\Delta g_{t+1} \downarrow$)、自然利子率が上昇し、GDP ギャップが縮小する。

